

《名誉教授から》

宴会でのマナー ―若い研究者の皆さんがたへ―

和田 昭 允 (名誉教授)

以下の文は若い方々に向けて書いたものなので、年輩の諸兄諸姉や御用とお急ぎの向きは、どうぞ飛ばして次に進んで下さい。

さて、私は昔からとても行儀が悪く、家では息子どものマナーが悪いのは私の影響だと家内にいつも叱られている有様です。服装なども、物理教室の同僚だったH先生ほどには徹底していませんでしたが、学部長になるまでは大学で殆ど着なしのノーネクタイでした。でも以下の事例は、そんな無作法な私でも気になってしかたないことなのですから、本当にミットモナイことだと思って下さい。

○ その1.

国際会議のバンケットや国内の結婚式の披露宴などで、一つのテーブルを8~10人ぐらいで囲んで食事をするのがよくあります。そこで気が付く我が同胞の特徴は、目の前に配られた料理にすぐかぶりつくことです。本来なら、同じテーブルの全員に皿が配られるまで待ってから、おもむろにナイフとフォークを取って食べ始めるのが礼儀でしょう。しかし、国際会議の夕食会などで最上席に座られるわが国の偉い人（当然、最初に皿が配られる）の中にもこの配慮のない方がかなり居られ、行儀のよい外国人研究者の中で同席していた私は、何度か恥かしい思いをしたことがあります。おそらく年輩の読者の大部分は同じ思いをされたことがあるのではないのでしょうか。機会があったら気を付けて観察すれば、先進国の研究者でこのルールに反する人は、まず絶対にいないことが判るでしょう。彼らのテーブルの全員に皿が配り終えるまで、会話などで実にうまく時間を潰します。

○ その2.

食事中の会話について気が付いたことですが、自分に関係のある狭い問題を、特定の人だけに、相手や同席の人達が面白がって聞いていると思って延々と喋る人がいます。聞かされる本人は困ったような顔をしているし、周りもしらけてしまっているのに、おかまいなしという調子です。これも先進国のある程度以上の研究者にはみられない特徴です。話題は適当に同席のメンバーに振るべきですし、テーブルの中のシニアメンバーともなれば、同席のいろいろな人から話を引き出してきくことも心がけるべきでしょう。もっともこれを余りやりすぎると嫌みになってしまいますが。ただし、研究会の延長の食事のときにはこの限りではありません、そもそもそれを宴会とは言いません。

以上の前提として、同じテーブルに座ったら出来るだけ紹介し合う、また、隣の人との間では自己紹介するこ

とが必要です。

しかし、食事中の会話に関しては、小生も決して大きなことを言えた義理ではなく、振り返って反省することが多々あるたとを白状しておきます。

○ その他、トリビアルなこと

隣にご婦人が座るときは椅子を引いてあげる。魚（たとえば、鰯、鰯）の裏はひっくり返さずに骨を外して食べる。ステーキなどは、切りながら食べ、“切り貯め”しない。のみ喰いの音を立てない。バターや砂糖など共有のものは、自分を取る前に周りに勧める。隣の人の前を横切って手を出してはいけない。離れたところにある塩や胡椒入れなどは頼んで取って貰う、また、手渡しでは受け取らず、一度テーブルに置いたものを取る。肘は絶対にとなりの人に触れない。ワインやビールをついで貰うときは、グラスはテーブルに置いたままにし、手に持たない。ワイングラスなどについた唇の痕は適宜拭き取る。使い終わったナフキンはあまり丁寧には畳まない（これは多少古いマナー？）。

また、ビュッフェ・パーティーでは、料理の並んでいるテーブルの前で食べたり会話などすることで、他の人が料理をとりに来るのをブロックしない、etc。

ほかにもいろいろとあると思いますが、これを読まれた方で、他にになにか「マナー」で気付かれていることがあったら、ぜひ「広報」に書いて戴きたいと思います。といいますのも、最近のわが国の国際化にともなって外国人との宴会や交際も多くなってきています。その様なところに出て来る外国の人達はかなりの教養人が多く、他人への気配り、話題の広さ、会話にみられる機知、上記の例のようにテーブルを共有する際のマナー、などによって結構人物評価をしていますので、今後国際会議などにかけられる若い皆さんが“学問”だけでなく、“人間的な味わい”においても尊敬されるようになるために、お願いする次第です。

理学部の学生さんも、我々の頃と違って英語は段違いに旨くなりましたが、それだけでなく、もっと国際的に洗練されて欲しいと思います。また、本来行儀が悪く国際的にも洗練されていない私は気が付かないことが多くあると思うので、私も教えて戴きたいのです。研究者はとかく独善的な「裸の王様」になりがちです。研究のレベルが高いことは、研究者として尊敬される必要条件ですが、人間として尊敬され敬愛される充分条件とはいえないと思うので一筆した次第です。

紙幣に登場した「B教授」

福島 直 (名誉教授)

寺田寅彦が書いた「B教授の死」と題する随筆の概要を記すと、『オーロラの研究で世界的な名声を得ていたB教授が大正6年の5月の初め、突然東大に訪ねて来て、寺田先生とはその後1カ月半ほど交際が続く。6月の中旬B教授と呼ばれて宿舎を訪ねると、B教授は「体の具合が悪いから寝たままで・・・」と言ってベットに横たわったまま一時間ほどもかけてスパイに追われている話をした。軍事上の考案をして某国に売込んだら、それ以来某国のスパイに追われるようになった由。「このことを一度誰かに話したいと思っていたが、今日君にそれを話してこれでやっと気が楽になった」とB教授は静かに語った。そしてその翌日、寺田先生はB教授死亡の知らせを受けた』という筋書きである。

この随筆中の物語のモデルがノルウェーの世界的物理学者 Kristian Olaf Bernhard BIRKELAND で、同教授は50才の誕生日を迎える半年前、1917年6月15日に上野精養軒付属ホテルで睡眠剤の量を誤って死去している。私の学生時代には地球物理学科の木造建物が弥生地区の高台（現在計算機センターが建っている場所）にあり、講義室の窓から上野精養軒を眺めながら、永田武先生からこの印象深い物語を聞いた。それから半世紀を経た今、実は私ほどB教授のお蔭で研究成果に恵まれた者はいないのではないかとさえ思っています。

Birkeland 教授の肖像は、祖国ノルウェーで昨年発行された200クローネ（邦貨約3,700円）新紙幣に印刷されている。科学者の肖像が記念切手に登場することは屢々あるが紙幣に使用された例は極めて稀であろう。1995年2月16日発行の Nature 誌は『Birkeland 教授は1867年生まれで、初め数学者として知られ、Maxwell 方式の一般解を求めた最初の物理学者であった。彼が挙げた幾多の業績のうちで最もよく知られていることは、恐らくオーロラに関する研究と北極地域に地磁気観測網を建設した努力であろう。彼はまた応用物理を広く手がけ、空中窒素固定の工業化に使われたプラズマ放電のほか59件の特許を持っている。空中窒素固定法の発見は、のちにノルウェー最大の企業となった Norsk Hydro 社を設立する基盤となり、Birkeland 教授はオーロラ研究につき込む研究費を同社から提供してもらえるようになった』と紹介している。しかし、私は次に述べる理由の方が実際にはもっと高く評価されていたと思います。

ノルウェー王国が1905年にスウェーデンから分離独立した当初は財政的に苦境にあったが、Birkeland 教授案出の空中窒素固定法を利用して製造された人工肥料を輸出

Norway honours space physics pioneer

Oslo. The government of Norway has honoured Kristian Birkeland, one of the world's earliest space physicists, by printing his portrait on a new 200 kroner (US\$30) banknote (right).

Birkeland, who was born in 1867, began his academic career as a mathematician, and was the first physicist to complete a general solution of Maxwell's equations. He is perhaps best known as a researcher for identifying the mechanisms behind the aurora borealis — as well as for his efforts in establishing a network of observation stations in the Arctic.



But he also had a strong practical bent, registering 59 separate patents that included the plasma arc that led to the first industrial process for nitrogen fixation. This discovery formed the basis of what has become one of Norway's largest companies, Norsk Hydro, and provided Birkeland with an income to finance his auroral research.

NATURE · VOL 373 · 16 FEBRUARY 1995

して同国の経済事情が大いに恩恵を受けた。従って当時のノルウェー経済を支えてくれた恩人として彼の肖像が新紙幣に登場したと解釈する方がより自然であろう。

私は本学部卒業後、大学院特別研究生として永田先生の許で「磁気嵐現象」を主題にして学位論文を書いた。その論文では、当時の学界では忘れられかけていたB教授の先駆的業績を改めて再認識すべきことを強調した。寅彦の随筆中では、東大理学部（当時は理科大学と呼ばれた）事務室にB教授が突然訪ねて来た時のことが次のように書かれている。『教授が今ここの図書室で見たいと言った本は、同教授の関係した北光観測のエキスペジションの報告書であったが、あいにくそれが当時の物理学教室になかったので、あてにして来たらしい教授はひどく失望したようであった。』このような一節が随筆中に書かれているので、私はてっきりB教授の分厚い報告書は日本では見られないものとあきらめていた。しかしある日、「物理学教室図書室ではB教授の報告書を貴重図書として保管しているが、利用者が殆どないので、どこか移管を申し出てくれるところがあればよいかと期待しているようだ」と先輩から聞きました。私は欣喜雀躍して同図書室に赴き、交渉の結果さしあたり99年間の期限付借用書を入れてB教授の分厚い著書二冊を借り出しました。この本には大正13年（1942年）東京帝国大学中央図書館購入と朱印が押されている。私自身の勝手な推測ですが、B教授変死事件後、寺田寅彦教授はこの本を購入しておく必要を感じて早速発注されたが、注文図書の入荷は海運業界で欧州大戦の影響がおさまるまで遅れたのであろうと思っています。